



なごや「聖歌」だより 6月号'10

この世のおもんばかりを離れて・・・

修道院に行くと、知らず知らずのうちに祈りの気持ちになってゆきます。長い年月祈り重ねられてきた場所は土壌や空気までが聖神の働きによって変化されているようです。

市中の教会の聖堂もやはり祈りのために特別に用意されたもので、外の世界とは全く別の静けさがあります。聖堂の形、イコンの配置、ろうそくの明かり、香炉の煙、すべてが人のたましいを神の国へ向かうわせるようにつくられています。ここで行われる奉事(礼拝)はこの特別の場所に生命を吹き込み、天の国に引き上げてゆきます。

ところで、私たちの礼拝のほとんどは「歌い」ます。「読み」と言われている誦経や連祷などの祈願の部分も、音の高さは一定で地味ですが、日常の話言葉やスピーチとは異なる「歌」です。「この世の慮りを離れて」日常とは異なる「歌」に乗せられて神の国をめざします。

「歌」にはメロディとリズムがあります。それが祈りの「動き」をつくりだします。連祷も、誦経も、聖書の読みも、司祭の唱える祝文も一種の「歌」です。さらに「連祷」からアンティフォンが流れ出し、アンティフォンがまた次の連祷にという具合に続き、「継ぎ目」のない「歌」の連鎖によって、全体が形作られています。

「教会」はハリストスの「体」といわれます。聖使徒パウエルはローマ人への手紙の中で「一つの体にたくさんのメンバー肢体があるが、それらの肢体がみな同じ働きをしてはいないように、ハリストスにあって一つの体であり、また各自は互に肢体だからである。」体の各器官が異なる働きをしながら調和の取れた全体を形作るのが教会

だと述べています。同じことは教会の生命の頭れである礼拝にもあてはまります。それぞれが積極的に、かつ協力しながら働き、調和のとれた礼拝全体を形作ります。

聖歌を歌うときも「自分が間違いなく歌えばよい」、「自分が気持ちよく祈ればよい」では不十分です。ひとりひとりが全体を担う不可欠の部分として積極的に、しかも全体と調和して歌うことが求められます。もちろん神品や誦経にも他と協調する「歌」が求められるのは言うまでもありません。「ほかの人と合わせよう」と意識することから始まります。

歌う?読む?

基本的に祈禱書には「歌う」か「読む」かの規定はありません。日本ではスティヒラはふつつ読みますが、「主や爾によぶ」などと同じスティヒラのメロディで歌うことができます。簡単なメロディであっても、ことばの句切りを考えながら歌うと、ことばの理解が深まり、音楽によって内容がわかりやすくなります。六調(天の王と同じメロディ)など簡単なものだけでも歌ってみるのもよいかもしれません。

もうひとつ、音楽の効用に気づきました。聖神降臨祭のスティヒラのなかに「我等すでに真の光を見・・・」という歌がありました。読んだだけでは気づきませんでしたが、二調のメロディで歌ったとき、聖体礼儀の領聖後の歌と同じであることにハッとしました。五旬祭の日使徒達が聖神を受けたように、私たちも聖体礼儀にも聖神は降り注ぎ、私たちは今、ご聖体をいただき「真の光」「天の聖神」を受けたのだ。二つの祝いの意味が音楽によって一瞬のうちに結び合わされました。

聖歌練習

♪名古屋:

6月20日代式後、各主日聖体礼儀後
パニヒダ埋葬式を、練習したいと思います。
また朝、9時15分頃から声出しウォーミングアップ
をしています。どなたもご参加できます。

♪半田: 6月9日 11:45

ズナメニイ研究会

次回 6月16日水曜日 10時30分～

前回からクリューキ記号の復習をしています。西洋音楽の楽譜に書き写してしまえば、どれも同じ二分音符になる記号にも、さまざまな意味が含まれていることがわかりました。古いズナメニイ聖歌の奥深さを感じます。

6月の指揮当番

6日 エレナ広石 27日 ピーメン松島

4. コンダク(小讃詞)とイコス(同讃詞)

τὸ κοιτάκιον; кондакъ / οἶκος; икосъ

その2

—古代のコンダクを見る—

コンダクは今では縮小されて、先行節「ククリオン」とイコス一つのみになってしまったと前回書きましたが、今でもかつての大きかりなコンダクがそっくり残っているものがあります。それは大斎第5週土曜日に行われる「生神女のアカフィスト」です。早課の中に分割配分されていますが、かつての姿をしのぶことができます。

このコンダクは冒頭の文字を拾うと、ギリシア語のアルファベット順になっています。こういう文字遊びはユダヤ系をふくむセム系文学の特徴と言われます。

ロシアでは聖人や祭日などにさまざまなアカフィストが歌われます。これらは後の時代にふるいアカフィストを真似て創作されたもので正規の祈祷書(祭日経や三歌斎経など)には含まれません。内容が絵画的でわかりやすく、リフレインを使って会衆参加が可能、司祭がいなくても信者だけで行うことも出来るので、民衆に愛され、さまざまなアカフィストが作られ、頻りに歌われています。

◇アカフィストの歌

(大斎第5週土曜日、アカフィストのスポタ)

(ὁ Ἀκάθιστος ὕμνος; акафистъ, неседальное пение)

アカフィストの歌にはかつてのコンダクの形がそっくり残っています。先行節となるククリオンに続いて12個の短い節と同数の長い節が交互に歌われます。短い節はコンダクと名付けられ、各節の最後は常にア ril イヤのリフレインが歌われます。長い節の方はイコスと呼ばれ、ククリオンの末尾と同じことば(「嫁ならぬ嫁や、慶べ」)がリフレインとして歌われます。

アカフィストの名称は文学上音楽上の詩や歌の形ではなく、この時會衆が「立つ」ことに由来します。ギリシア語の ἀκάθιστος、ロシア語の неседальное は字義的には「座らない」の意味で、これを歌うとき會衆は立ちます。逆にセダレンは「座る」の意味で、このときは「座ってよい」のです。

『生神女へのアカフィスト』はアカフィストの中でも最も古く(7世紀)、正規の祈祷書(『三歌斎経』)に編入されています。今は大斎の第5週の土曜日の早課のなかに4つに分割されて挿入されています。各部はククリオン「生神女や我等」で始まり、続いて3つのコンダクと3つのイコスを交互に歌い、もう一度同じククリオンを歌って終わります。

挿入箇所は(1)第1カフィズマのあと、(2)第2カフィズマのあと、(3)カノンの第3歌頌と連禱のあと、(4)カノンの第6歌頌と連禱のあとの四箇所です。(1)(2)(3)は通常セダレン(坐誦讃詞)が行われる位置、(4)は現在の短くなったコンダクが歌われる(読まれる)場所です。

現在では司祭が各節を唱え、聖歌隊あるいは全会衆が参加してリフレインを歌います。

たのしいアカフィスト実践

こんなやりかたもあります

<ククリオン> 歌う

生神女よ、我等爾の僕婢は禍より援けられしを以て、爾克く勝つ将帥に凱歌と感謝とを奉る、
勝たれぬ権能を有つに依りて、我等を諸の苦難より救ひ、爾を歌ひて呼ばしめ給へ、**聘女ならぬ聘女よ慶べ。**

<第1イコス> 読む

首品の天使は天より生神女に慶べよと云はん為に遣されて、此の無形の声と共に、主よ、爾が身を取るを見て、驚きて立ち、斯く彼に呼べり、

☆ここから前半を読んで、「慶べ」の部分を皆で歌う…

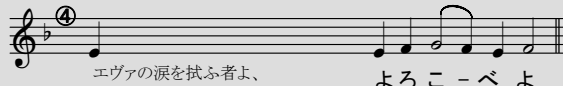
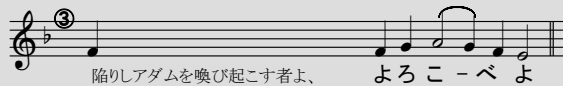
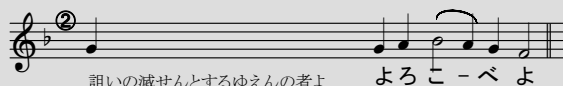
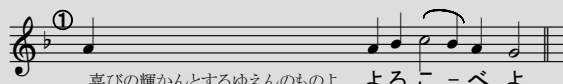
喜びの耀かんとする所以の者よ、**慶べ(よ)①**、

詛いの滅せんとする所以の者よ、**慶べ(よ)②**、

陥りしアダムを喚び起こす者よ、**慶べ(よ)③**、

エヴァの涙を拭ふ者よ、**慶べ(よ)④**。

☆下記、歌い方の例 4つのメロディを順に繰り返す。



☆以下同様に

人の意念の登り難きたかさよ、**慶べ(よ)①**、

天使の目にも見難きふかさよ、**慶べ(よ)②**、

王の座たるに因りて**慶べ(よ)③**、

万物を載する者を載するに因りて**慶べ(よ)④**、

日を踰す星よ、**慶べ(よ)①**、

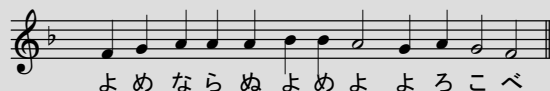
神が身を取る腹よ、**慶べ(よ)②**、

造物の新たにせらるる所以の者よ、**慶べ(よ)③**、

我等が造物主に伏拜する所以の者よ、**慶べ(よ)④**。

☆最後にリフレインを歌う

聘女ならぬ聘女よ、慶べ。



<第1コンダク> 読む

☆最後にリフレインを歌う

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ

<第2イコス> 読む、第1と同様に「慶べよ」を歌い、最後にリフレイン。☆以下同様に行う。

※楽譜と文中で「慶べ」「慶べよ」が異なっていますが、気になるようでしたら適宜修正してください。私は歌の場合、「慶べよ」の方が歌いやすいように思います。

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 Liturgia

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料